

令和3年8月28日付山陰中央新報

国際交流 しまね・ブータン王国物語 (柳楽正雄著)

ブータンというと、2011年に来日したワンチュク国王夫妻のさわやかな笑顔とともに「世界一幸せな国」というキャッチフレーズが思い浮かぶ。だが、ブータンという国について私たちはどれだけのことを知っているのだろうか。本書は日本との国交が樹立される直前から始まった、島根とブータンの手すき紙技術交流をメインにした草の根国際交流の記録である。

著者は元島根県職員。物産振興などを担当する課の係長をしていた時にグラフィックデザイナーの杉浦康平氏を介して、県に手すき紙の技術交流の打診があった。そこで1986年2月、安部信一郎・出雲民芸紙業協同組合理事長、久保田保一・石州半紙技術者会長、著者ら一行4人は国交樹立直前のブータンを手探り状態で訪問。現地の手すき紙業の実状を調査した。

久保田会長が鮮やかな手すき紙で和紙をすく実演を見ると「薄い見事な紙が漉かれています。皆が見とれていた」。まさに交流の「全ての物語は島根の誇る和紙の技術協力から始まった」。



松江八雲町や浜田市三隅町での手すき和紙研修には、ブータンから3人がやってきて5カ月間滞在。この時、リーダー格の一人に重い心臓病のあることが判明した。最初の訪問直後に設立されていた島根県ブータン友好協会が中心になって、手術費用の募金活動。目標額を上回る募金が集まり、再来日しての手術は成功した。

石州和紙の里・三隅町からブータンへの日本式紙すき機材のプレゼント、海士町との教育交流など、その後も島根との多彩な交流は続いていく。

具体的なデータを基に、時系列を追って平明に記されているから、交流の様子が手に取るようによく分かる。ブータンの国情も随所につかえ興味深い。著者は県ブータン友好協会の設立当初から事務局長を務めていて、行間にはその献身的な活動がにじみ出る。多くの写真や詳細な交流史年表も収録されていて、交流の足跡が本文以外でも浮き彫りになっている。

(岡部康幸・島根県立大非常勤講師)
(ハーベスト出版・1650円)

知ってほしい「場面緘黙」

松江の自助グループ女性が体験談

家族とは普通に会話できるのに、学校など特定の状況では話せなくなる「場面緘黙」に苦しむ子どもたちは、強い不安や緊張の中で声にならないSOSを発している。子ども時代に経験し、現在は自助グループに関わる松江市内の20代女性が体験を語ってくれた。

(大迫由佳理)

「あの時話せていたら」と引離れていった。卒園アルバムの一冊きずって生きてきた。女性は小学4年までの6年間、場面緘黙に苦しんだ。「あの時」とは、初めて話せない状態になった5歳の時。島根に引っ越し、幼稚園でいさつをする場面だった。新しい友達を前にひどく緊張し、言葉が出てこなかった。

以降、人前に立つ時に限らず、友達との会話もできなくなった。話し掛けてくれる子がいなくても、うだつたため、家族からは不思議がまわく答えられず、次第にみんなが

話さない子を気に掛けて



幼少期に場面緘黙を経験した女性。経験者として自助グループの運営を担う＝松江市内

当事者のための自助グループ「言葉の会」を2018年に立ち上げた。現在も運営委員として活動。交流の場を全国各地やインターネットを通じて開き、居場所づくりを目指す。

自助グループの活動を通して「過去の自分はずこく頑張っていたと、やっと認めてあげられるようになった」と語る女性。「当事者は助けを求めることが困難。周りに『話さない子』がいたら気に掛けてほしい」と求める。

「なんで話さないの？」と聞かれても、自分にも分からない。話せないのは自分が悪い」と責め続けた。

変化があったのは小学5年の頃。引越して登校班が変わり、クラス替えがあった。すると、少しずつ話せるようになった。その後、時間とともに場面緘黙は治まったが、多感な時期に話せずに孤立した経験は、進学後も人間関係に影響を与えた。

大学1年の頃、「場面緘黙」を知り、過去の自分と重なった。「自分の中で雷が落ちたようなすごい衝撃だった」といい、同時に「救われた気持ちにもなった」。自分のせいではなく、適切な支援を受けるべき人だったと知った。

「自分と同じような思いをする子を減らしたい」。そう強く思い、全国の当事者や経験者と一緒に、

島根県立大 園山教授に聞く



「場面緘黙は早期の発見、早期の対応が重要」と話す園山繁樹教授。松江市浜乃木7丁目、島根県立大松江キャンパス

早期の発見、対応重要

日本場面緘黙研究会会長で、島根県立大人間文化学部園山繁樹教授によると「早期の発見と対応が重要」。特に「場面緘黙は、本人の意思に「見」はしやすい。学校で話関係なく学校などで話せない子がいたら、家庭でくんだり、体が思うように動かない、体が思うように動かせなくなる場合もある。

統計上、5歳前後での発症が多く、500〜600人に1人の割合でいる。中には中学、高校で発症するケースがある。

学校の敷地に入ると話せなくなる子もいれば、学校の中でも幼なじみと2人きりなら話せる子もいるなどさまざま。「場面緘黙の子」どもは授業中に騒いだり、妨害したりしない。教師は困らないため、支援が届きにくい」という。

教育現場には「四つの誤解」がある。ただおとなしい性格▽反抗的な子ども▽放っておけば治る▽過去に心理的にショックを受ける体験があった。この

園山教授は「全く配慮されないままだといじめや不登校を助長する。話せるようになっても、うつ病など二次障害につながる場合もある。早期に適切な対応をとることが重要」と呼び掛ける。